

雌阿寒岳の火山活動解説資料（令和6年12月）

札幌管区気象台
地域火山監視・警報センター

火山活動は静穏に経過しており、噴火の兆候は認められません。
噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○活動概況

・噴気など表面現象の状況（図2～3、図4-①～⑥、図5-①）

監視カメラによる観測では、各火口の噴気の高さ（いずれも火口縁上の高さ）は、ポンマチネシリ96-1火口、赤沼火口及び北西斜面06噴気孔列では概ね100m以下、中マチネシリ火口では概ね200m以下で経過しており、噴気活動は低調な状態です。

・ポンマチネシリ96-1火口周辺の全磁力の状況（図5-②）

全磁力連続観測では、火山活動の活発化を示唆する特段の変化は認められていません。

・地震及び微動の発生状況（図4-⑦～⑧、図6）

火山性地震は少ない状態で経過しました。震源は主にポンマチネシリ火口のごく浅い所～深さ0km付近、中マチネシリ火口の深さ0～1km付近に分布しました。

火山性微動は観測されていません。

・地殻変動の状況（図7～8）

GNSS連続観測によると、火山活動の活発化を示唆する特段の変化は観測されていません。

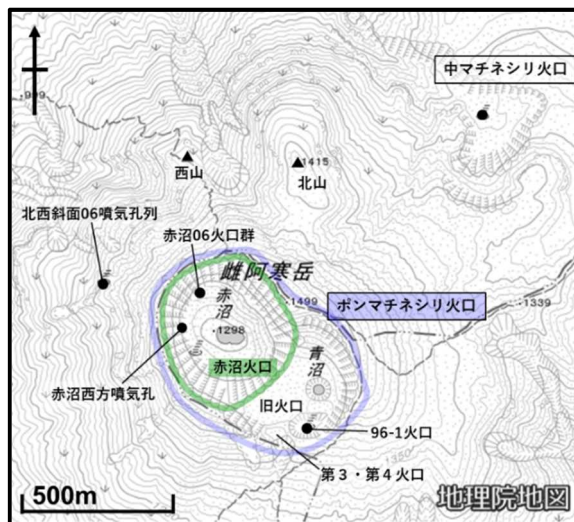


図1 雌阿寒岳 火口周辺図

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警戒等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/now/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータを利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図10mメッシュ（火山標高）』、『数値地図50mメッシュ（標高）』、『電子地形図（タイル）』、『火山基本図』及び『基盤地図情報』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和7年1月分）は令和7年2月10日に発表する予定です。

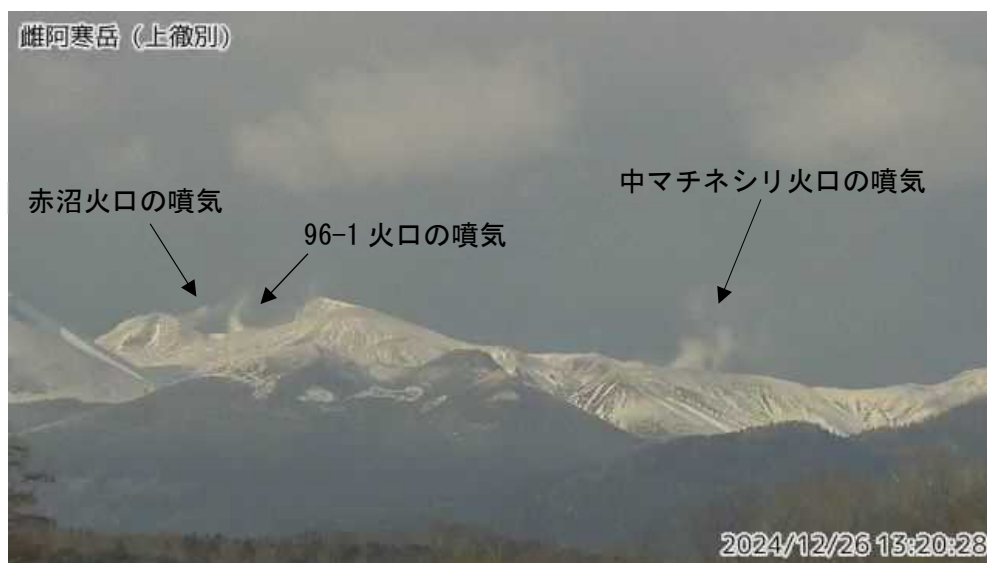


図2 雌阿寒岳 南東側から見た赤沼火口、96-1火口及び中マチネシリ火口の状況
(上徹別監視カメラによる)



図3 雌阿寒岳 西側から見た赤沼火口及び北西斜面 06 噴気孔列の状況
(オンネトー展望台（道）監視カメラによる)

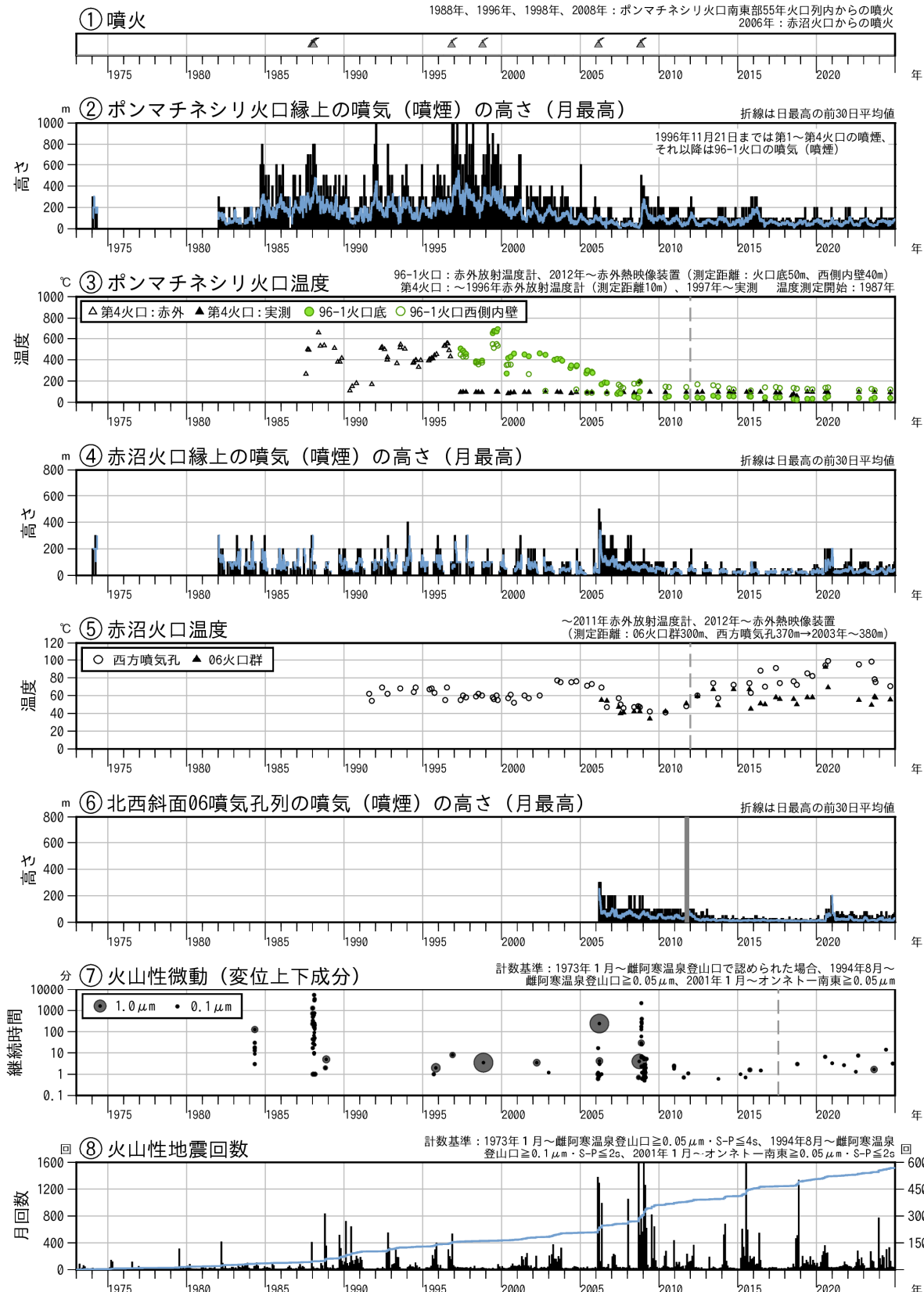
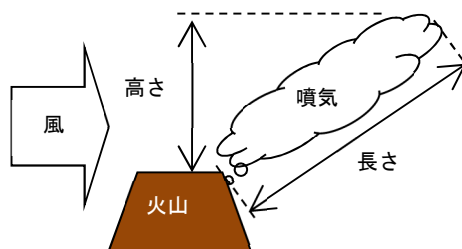


図4 雌阿寒岳 火山活動経過図（1973年1月～2024年12月）

- ③：各火口温度は北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータを含みます。
③⑤：測定機器の変更により、2012年（破線）前後では測定温度に差が生じている可能性があります。
⑥：灰色部分は機器障害による欠測を示します。
⑦：火山性微動の継続時間は、2017年8月（破線）前後で計算方法が異なります。
各火口の位置は図1を参照してください。



噴気の高さと長さ

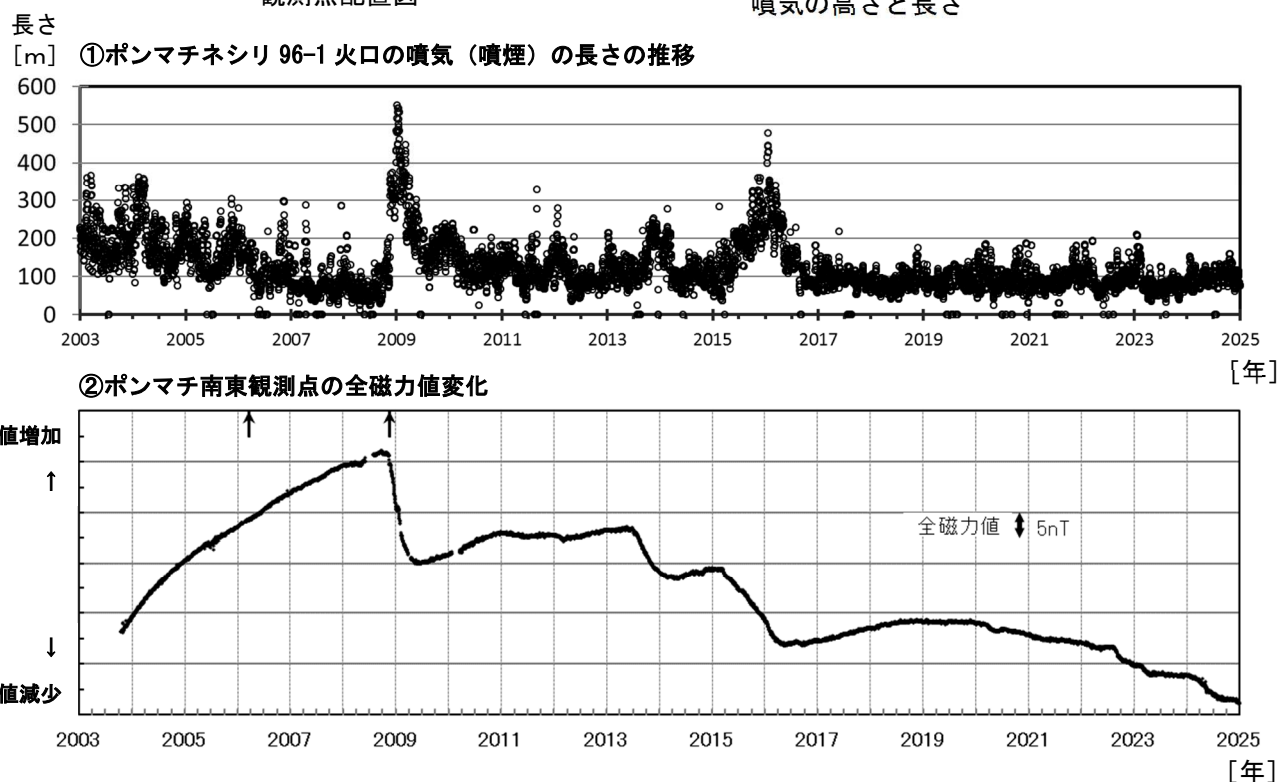


図5 雌阿寒岳 ホンマチネシリ96-1火口の噴気（噴煙）の長さと全磁力値の経過及び全磁力観測点配置図（2003年～2024年12月）

①のグラフに示す噴気の長さは気温の影響を受けることから（気温が低いと噴気は長くなり、高いと短くなる傾向がある）、気温補正後の値をプロットしています。

②のグラフに示す全磁力値は、地磁気観測所女満別観測施設との全磁力値差をプロットしており（表示開始は2003年10月16日）、空白部分は欠測を示します。

図中の↑は噴火を示します。

- ・ 2016年5月以降、96-1火口の噴気量は概ね低下した状態が続いています。
- ・ ポンマチネシリ96-1火口南側のポンマチ南東観測点で、3月頃から96-1火口近傍の地下における熱活動の活発化の可能性を示す全磁力値の減少傾向がみられましたが、7月以降は概ね停滞しています。
- ・ 中長期的には、2020年頃から全磁力の緩やかな減少がみられています。

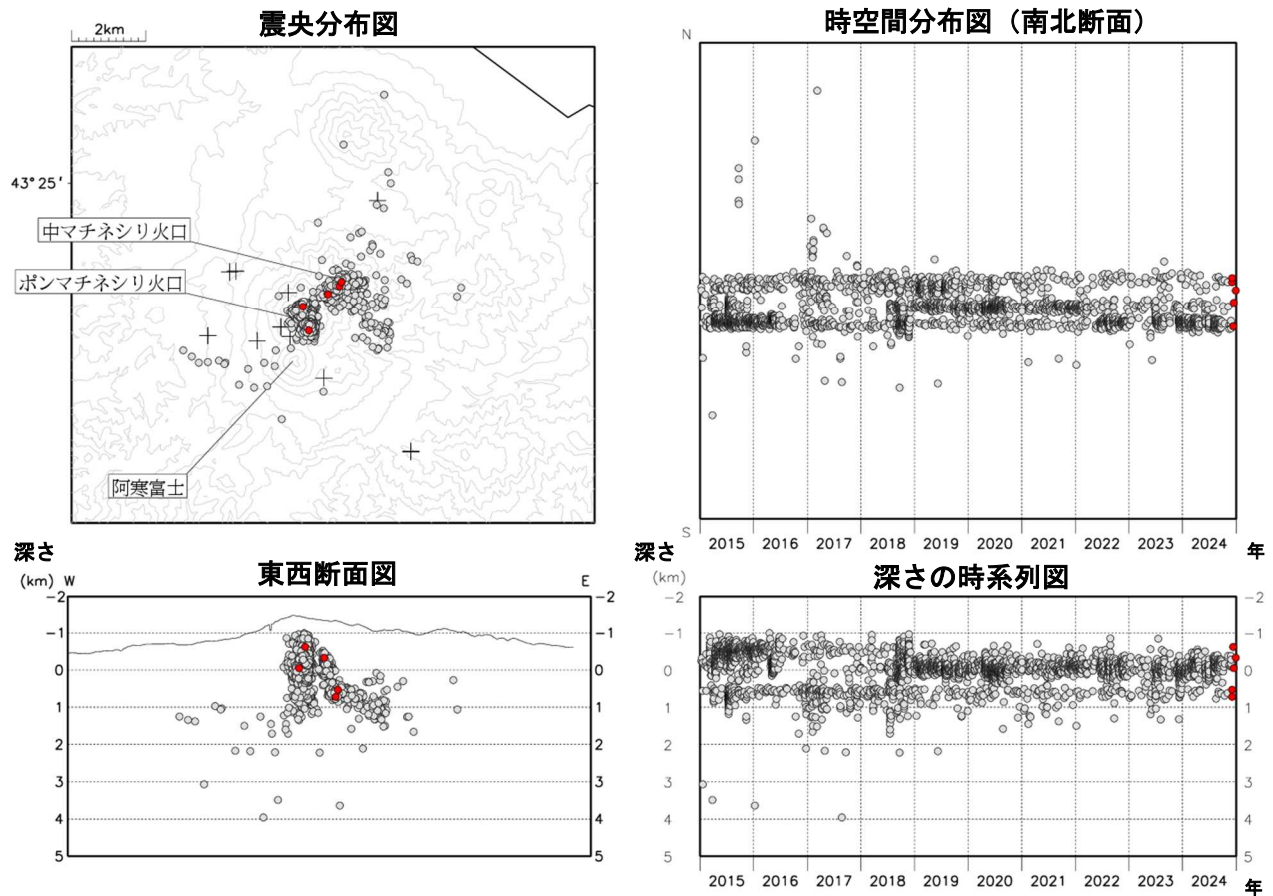


図6 雌阿寒岳 火山性地震の震源分布（2015年1月～2024年12月）
 ●：2015年1月～2024年11月の震源 ●：2024年12月の震源 +：地震観測点

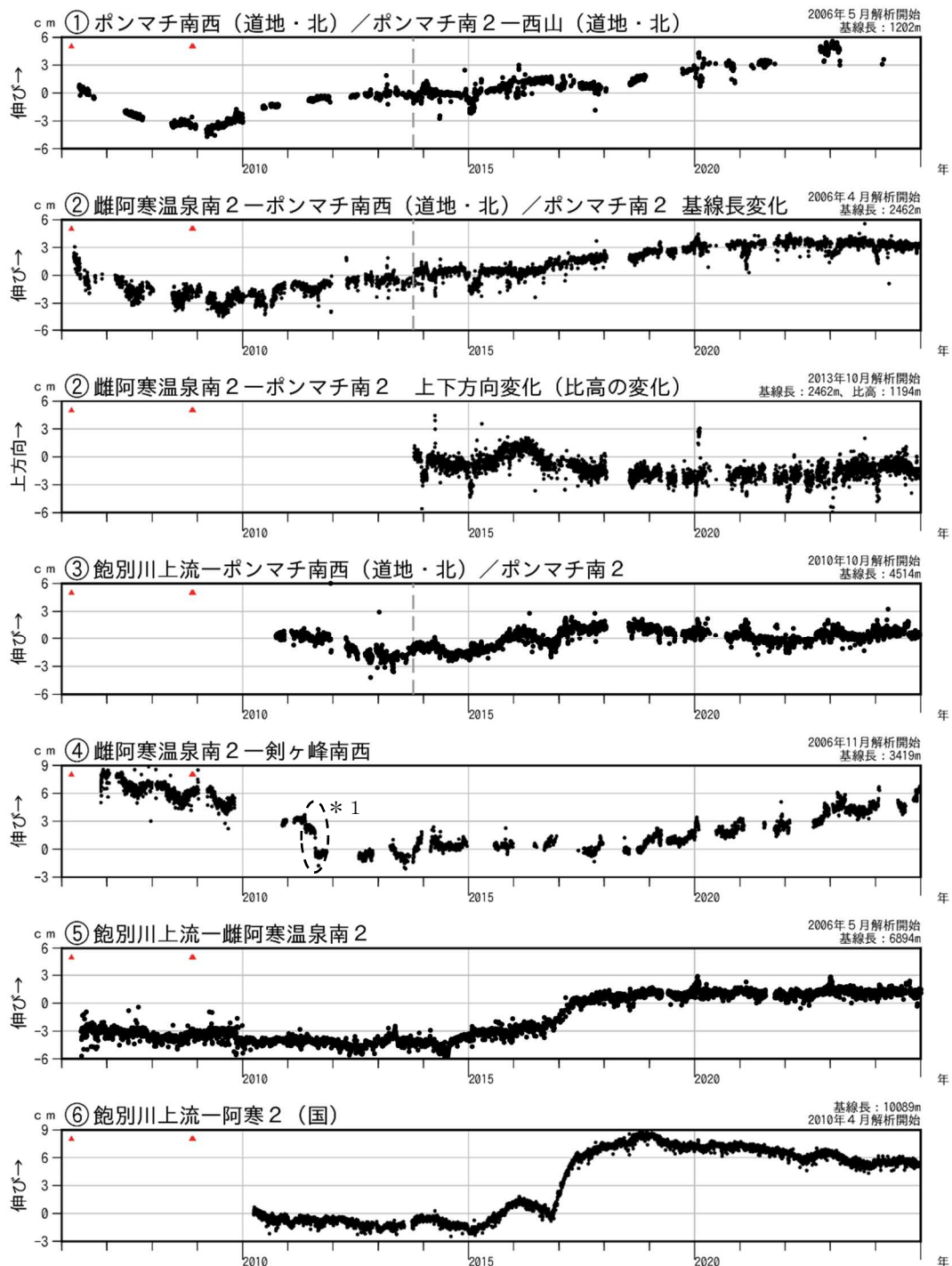


図7 雌阿寒岳 GNSS連続観測による基線長及び比高の変化（2006年4月～2024年12月）

グラフ①～⑥はGNSS連続観測の基線図（図8）の基線①～⑥に対応しています。

▲はごく小規模な噴火の発生を、空白部分は欠測をそれぞれ示します。

グラフ①～③では2013年10月10日（縦破線）にポンマチ南西からポンマチ南2に変更しています。

グラフ②は基線②の基線長と比高を別個に描画しています。比高は雌阿寒温泉南2からみたポンマチ南2の上下方向の動きを表しています。

* 1：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。

冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。

- ・ 山体を挟む基線⑤⑥では、特段の変化は観測されていません。
- ・ ②（比高）及び③では、2022年頃からポンマチネシリ火口付近浅部の膨張収縮を示唆するわずかな基線の伸長・隆起及び短縮・沈降、④では2019年頃から中マチネシリ火口付近浅部の膨張を示唆するわずかな伸長が認められます。

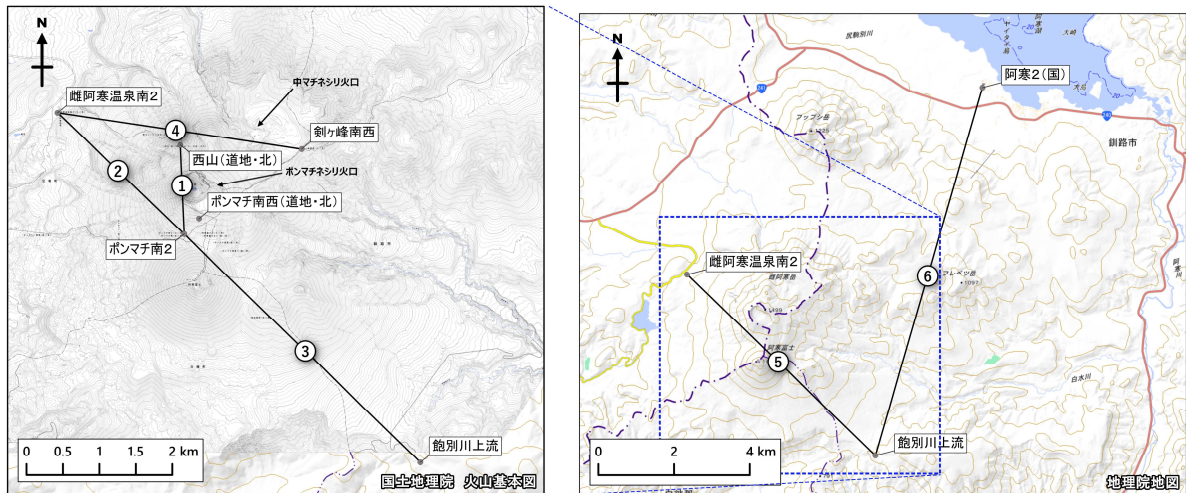


図8 雌阿寒岳 GNSS連続観測の基線図

基線番号①～⑥は、図7のグラフ①～⑥に対応します。

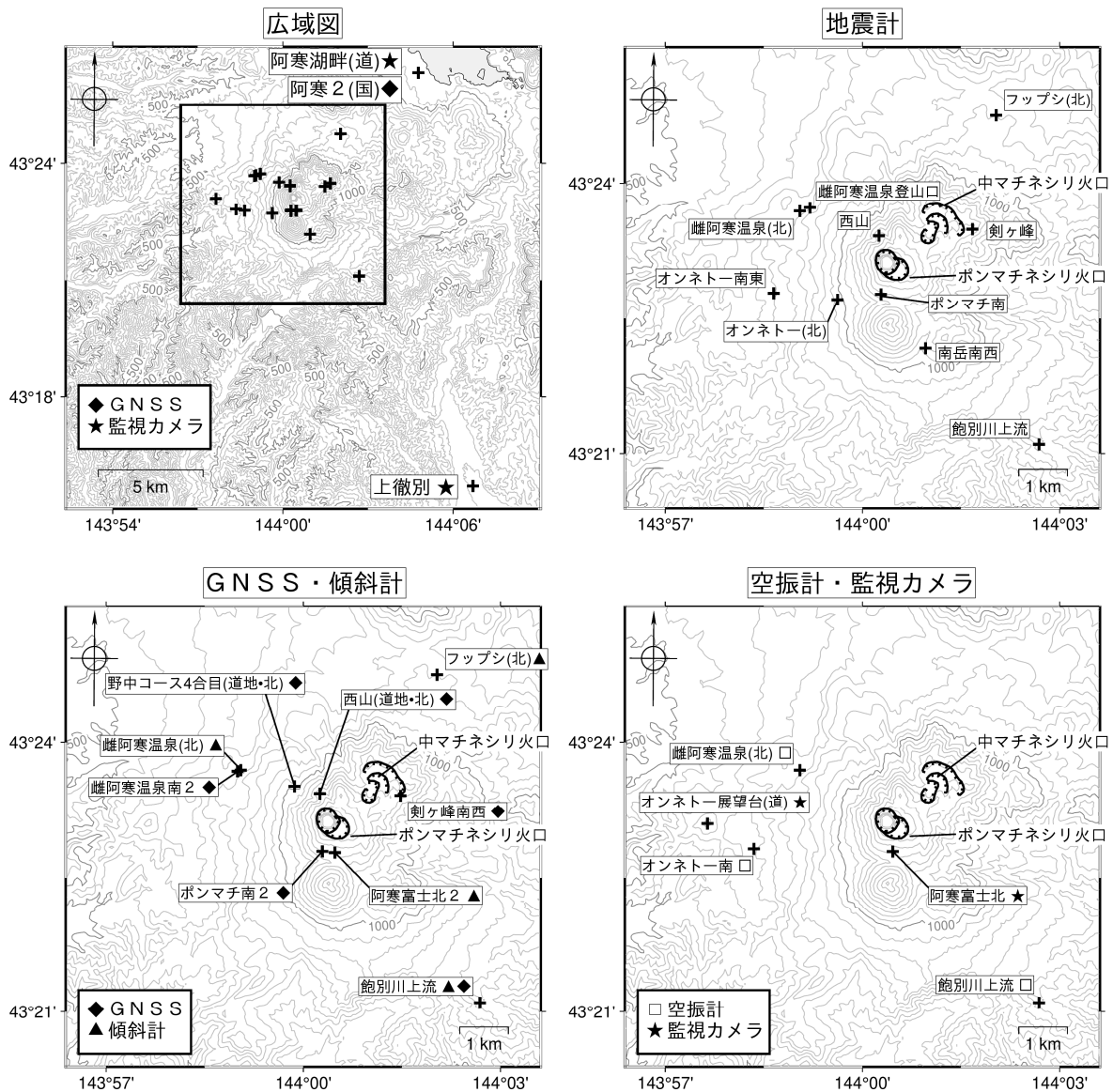


図9 雌阿寒岳 観測点配置図

各機器の配置図は広域図内太枠線で示した領域の拡大で、+印は観測点の位置を示します。

気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています。

(国)：国土地理院 (北)：北海道大学 (道)：北海道
(道地)：北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所